



帰宅に使う快速電車の前で。左がミヤコさん。右はテニス部のチームメイト百瀬さん。
最近、百瀬さんはミヤコさんとはじめてケンカをした。ケンカの理由は「わたしの話を聞いてくれなかったから」。
その日に仲直りした。

「はじめ日本が嫌いで、その次はブラジルが嫌いに……。でも今は、両方も好き」。

松南高校2年生のムラヤマ・ミヤコさんは、ブラジル第2の都市、リオ・デ・ジャネイロ生まれ。母国語より日本語が堪能で、両親の通訳をしたり、時には小学5年生の妹の参観日に出席したりもする。日本の食事を好み、音楽は浜崎あゆみやジャネット・ジャクソンを聞く。

ミヤコさんは16年前、両親とともに日本に移住した。まだ赤ん坊だったミヤコさんは、1歳の誕生日を成田に向かう飛行機の中で迎えた。

父のマサノリさんは当初、1年半くらい働いて、母国に帰るつもりだった。

しかし、家族はしだいに日本の環境や習慣になれ、経済的にも安定した生活ができたため、帰国予定はどんどん先送りになった。

しかし、マサノリさんには将来、母国で計画していることがあり、いつかは家族で帰国したいと考えている。

私の学生生活

18歳のチケット

ムラヤマ ミヤコさん 17歳
Murayama Miyako

リオ・デ・ジャネイロ州 → 明科七貴

母国にいたら

ミヤコさんは、明科の保育園に通い、小学校に入学した。周りになじめないと感じたことはなかったし、取りたてて、さみしいという思いもなかった。

そんなミヤコさんが、日本を嫌いだなくなったのは小学校3年生の時。

ブラジルの転入生が増えてきたことや、漢字の勉強が苦手になってきたことがきっかけで、自らの国籍について考えはじめようになった。

「何でみんなが日本人で、わたしは外国人なのだろう。ブラジルにいたら別の生活があったかもしれない」。

多くのクラスメイトと距離をおくようになり、心も離れていった。

小学校を卒業し、中学に入学しても自分の国籍への違和感は続いた。入学式では「外国人がいる」という声が聞こえ、戸惑いを感じた。

しかし、クラスで取り組んでいた「新聞作り」がミヤコさんの転機となった。

ミヤコさんが作った新聞は、母国ブラジルについて調べたものだった。

紙面の右半分には、日本とブラジルの学校の違いや習慣の違いなどについて書き、左半分には「ボンジア（おは

よう）」など、みんなに覚えてもらえそうなポルトガル語を書いた。

「ミヤコちゃん、外国語がしゃべれるんだ」と声を掛けてくる子や「筆記体のアルファベットの書き方を教えて」と言ってくる友だちもできた。

日本を嫌う気持ちは、いつの間にか、なくなっていた。

友だち

クラスメイトとの信頼関係が深まると、大事な友だちや慣れ親しんだ環境と離れるのが怖くなってきた。いつかブラジルに帰ることを思うと、心が曇った。

帰国について、両親と話し合う機会があると、「帰るんだしたらひとりで帰って」と言い放った。近くに住む叔母が「日本は地震が起こるかもしれないよ」と冗談まじりに言うと、「それならわたしも日本と一緒に沈む」と言い返した。

そんな2つの国の狭間で揺れ動く思いを、クラスの親友に打ち明けた。

「日本人だろうが、ブラジル人だろうが、ミヤコはミヤコだよ」。そう言ってくれた。

ミヤコさんは泣きたかった。

そして、その言葉は、自分を奮い立たせ、前に進む勇気を与えてくれた。